



媒体文明論



小林 道憲

媒体文明論

小林 道憲

(日本の哲学者)

文明は、関係によって生起してくるものであり、相関的にのみ存在するものである。文明は、相互に作用しあうことによって自己形成していく。文明の発展を理解するには、文明と文明が関係する横の関係を重視し、文明と文明を結びつけ、それらの仲介の役割を果たす文明に着目しなければならない。遊牧民や交易民や海洋民が作り出した文明は、そのような媒体の役割を果たした文明であった。この論文は、〈媒体文明〉という新しい概念を提出し、文明理論を一新しようとするものである。人類の営んできた文明とは何かを明らかにするには、諸文明の形成と発展を可能にした〈媒体文明〉に注目しなければならない。

文明の出会いと変動

シュペングラーは、『西洋の没落』の中で、エジプト、バビロニア、インド、中国、ギリシア・ローマ、アラビア、メキシコ、西欧の八つの文明（高度文化）を取り上げ、それらは、それぞれ独自の価値をもち、一個の有機体をなすものとし、その変動過程を、人間の成長段階や四季の移り変わりになぞらえた。つまり、どの文明も、幼年・青年・壮年・老年、あるいは、春・夏・秋・冬というように、誕生し、成長し、衰退し、没落するものと考えた。そして、特に、エジプト、ギリシア・ローマ、アラビア、西欧の四文明を比較、それらは、いずれも、相対的で同時平行的な推移を経るものとしたのである。¹ このシュペングラーの考えは、ヨーロッパ中心史観や一元的発展段階説から脱却し、多元史観を提出したという意味で、画期的なものであった。

しかし、シュペングラーの文明觀は、文明を自己完結的な統一体とみて、他の文明からの影響や文明間の伝播を無視、それぞれの文明は本質的に通訳不可能とみる独断に陥っていた。このようなシュペングラーの考えでは、シュペングラーが取り上げたどの基本文明も十分には把握できないであろう。どの文明も、他の文明の影響を濃厚に受けて自己形成しているからである。

トインピーも、ギリシア文明の末期と西欧文明の現在の酷似した状態から、文明の哲学的同時代性を発見、すでに同じことを語っていたシュペングラーの著作と出会い、そこから、文明単位の歴史考察と文明の同時代性および平行性の考え方を引き継いだ。そして、『歴史の研究』の中で、特に文明の変動論を展開、

シュペングラー同様、文明を一つの有機体とみて、いかなる文明も、〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉という過程を経ると考えた。ただ、トインビーは、シュペングラーと違って、文明の親子関係を認め、その時間的継承関係を明らかにし、文明の世代論を展開、人類の文明史を三つの世代にわたって展開されるものとした。さらに、文明の時間的出会い（ルネサンス）や空間的出会い（交流や衝突）の考察も展開し、文明間の交渉や影響にも注目、文明間相互作用も考えた。²

しかし、このトインビーの文明観は、一般に、〈ギリシア・ローマー西欧モデル〉から導き出されたものである。しかも、トインビーには、このモデルを他の文明にも無理に当てはめようとして、歴史の現実を曲げてしまった面がある。文明が、〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉の過程を描くという文明変動の一般モデルも、ギリシア・ローマ文明と西欧文明の平行関係や同時代性から抽出されたものであった。しかし、このモデルは、中国文明やインド文明には当てはまらない。中国文明やインド文明には、何よりも、死というものがないからである。〈ギリシア・ローマー西欧モデル〉が、どの文明にも当てはまるわけではない。滅ばない文明があることを考えれば、文明が必ず〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉という過程を描くとは限らないことになる。

それでもなお、この文明変動の規則性を、無理に中国文明やインド文明に当てはめようとすれば、中国文明やインド文明を適當なところで輪切りにする以外にないことになる。トインビーが『歴史の研究』の中で、中国文明を、第一世代の商（殷）文明、第二世代のシナ文明、第三世代の極東文明に分け、インド文明を、それぞれ、インダス文明、インド文明、ヒンドゥー文明に分けたのは、そのことによる。³しかし、中国文明やインド文明には、歴史を通じて一貫した文明展開が見られる。したがって、中国文明やインド文明を無理に世代論的に分断する必要はない。それにもかかわらず、トインビーがあえて中国文明やインド文明に世代設定をしたのは、いかなる文明も〈ギリシア・ローマー西欧モデル〉に従って変動しなければならないと独断したからである。

もっとも、トインビーは、『歴史の研究』第十二巻（再考察）では、このような批判を受け入れて、世代論の修正を行なった。⁴そして、晩年の『図説・歴史の研究』では、〈ギリシア・ローマー西欧モデル〉のほかに、中国モデルやユダヤ・モデルを考えた。⁵しかし、それでもなお、〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉という文明変動の定式は、そのまま維持されている。この点は、不徹底を免れないと言わねばならない。文明は、必ずしも、規則正しく変動するものでもなく、整然と世代に分断されるものでもない。また、文明は、厳密に同時代的なものではなく、平行関係にあるわけでもない。文明世界に単純で性急な法則を定立しようとすることは、厳に慎まねばならない。

トインピーが考えたように、〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉と一定の変動過程を経ることを運命づけられた文明があつて、かくて後、そのような文明と文明が合うといふのではない。むしろ、文明と文明が合うからこそ、文明の発生も、成長も、衰退も、解体も、消滅も起きてくるのではないか。文明の生も死も、出会いによって決まる。出会いによって生きもすれば死にもするのが、文明なのである。

例えば、西欧文明も、決して自律的に発生や成長をしてきたのではなく、異文明の流入によって発展してきた。特に、西欧文明の勃興に、イスラム文明が果たした役割は大きい。西欧中世の十二世紀ルネサンスも、アラビアを通して、ギリシアの哲学や科学を学んだことによるし、商業の発達も、地中海を通してのイスラムの影響による。西欧近世の人文主義の勃興や科学の発達、そして資本主義の成立も、この延長上にある。海洋への雄飛も、地中海を通して学んだ海洋イスラムの情報や技術を基礎にしている。十五・十六世紀のルネサンスも、単に古代ギリシア文明との時間的な出会いではなく、イスラムを介した空間的な出会いによるところが大きい。イスラムが、ギリシアの哲学や科学をよく保存していたからである。

さらに、このイスラム文明の影響の背後には、中国文明の影響があった。中国由来の製紙法や印刷術、羅針盤などが、イスラムを介して流入していくことなくして、西欧近世のルネサンスも大航海もありえなかつたであろう。また、西欧中世後期の商業の発達は、イスラムを介して、遠く中国宋時代の商業の発達と連動していた。西欧文明の成長も、イスラム文明や中国文明など、他の文明からの新しい文物の流入によるのである。

同様に、中国文明も、決して自律的に発展してきた文明ではなく、他の文明の影響を強く受けて形成されてきた文明である。実際、中国文明は、北方の草原の道や西方のオアシス路、さらに南方の南海路から流入していく外来文化の影響を常に受け、変動してきた。中国文明も、陸路や海路を通して、他の諸文明と縦横につながっていたのである。もともと、中国文明そのものが、北方から侵入してきた遊牧民と南方の海洋民のもたらした文化の融合の上に成り立っていた。漢民族そのものが、複合民族である。その漢民族によって形成された中国文明は、他の文明同様、多元的で重層的な文明なのである。それどころか、中国文明は、しばしば、北方から侵入してきた騎馬遊牧民による征服王朝や浸透王朝を経験してきた。これが中国文明の大きな変動と変容をもたらしたこと、確かである。中国文明も、外来文化の影響を多分に受けて、その度毎に再生復活してきた文明なのである。

中国文明にしても、西欧文明にしても、いかなる中心文明もそれだけでは成り立たず、常に外からの衝撃を受けて変動してきた。したがって、どの文明も、

自律的に、〈発生・成長・衰退・解体・消滅〉という整然とした文明変動過程を、法則通りに描くとは限らない。

過程としての文明

トインビーの文明の世代論の矛盾を指摘して、文明のサイクル論を提出したのは、クールボーンであった。トインビーの文明の世代論、つまり親子関係論の発想は、エーゲ文明—ギリシア・ローマ文明—西欧文明の三代にわたる文明継承をモデルに作られていた。しかし、このモデルに従って区分された中国文明と極東文明、インド文明とヒンドゥー文明の区別は、実際のところ不必要なもので、実質は、同じ一つの文明の継続と考えるべきものであった。確かに、これらの文明の途上では、文明の激変があったが、その後に、全く違った文明が誕生したわけではない。

もっとも、トインビーはこの矛盾に気づき、『再考察』で、インド文明と中国文明を親子二代に分ける考えを撤回、そのついでに、メソポタミア文明をシュメールとバビロニアの二代に分けるのも、撤回してしまった。⁶そして、『図説・歴史の研究』では、文明の中国モデルを付け加えるに至った。⁷しかし、それでも、一文明一世代説に固執しているかぎりは、矛盾を解決したことにはならないであろう。

クールボーンは、このトインビーの矛盾を解決するために、世代論を捨て、文明の親子関係を、同一文明におけるサイクルの交代と解釈することを提唱したのである。クールボーンは、長生きする文明は二サイクルあるいは三サイクルを描くと考え、これを、中国文明、インド文明、メソポタミア文明、エジプト文明に当てはめたのである。⁸世代論も、サイクル論も、文明の断絶と連続の対立を総合しようとするものではあるが、サイクル論はより連續性の方に傾いている。

しかし、この文明のサイクルはなぜ起きたのであろうか。ユーラシアの諸文明を見るかぎり、ほとんどの場合、文明のサイクル間には、異民族、特に遊牧民族の侵入があることが分かる。例えば、中国文明の場合、殷文明（黄河文明）や秦漢帝国の成立も、北方遊牧民がもたらした金属器製作技術の普及によるところが大きい。また、魏晋南北朝時代の混乱も、北方の草原の道から侵入してきた騎馬遊牧民族の大規模な民族移動によって、漢帝国が滅亡したことから起きた。インド文明でも、インダス文明の崩壊では、北方から侵入してきたアーリア人が決定的な役割を果たしているし、紀元後一世紀から三世紀にかけての混乱期にも、北方からのクシャン族の侵入がある。

また、特に文明の第二サイクルと第三サイクルの狭間には、多くの場合、新しい宗教が誕生または流入ってきて、次の文明サイクルを形成している場合が

多い。実際、インド文明でも、紀元後一世紀から三世紀にかけてのクシャン族の侵入とともに、仏教とヘレニズムが融合して大乗仏教が成立、それがヒンドゥー文化と融合して、グプタ文化を形成している。また、中国文明においても、魏晋南北朝時代には、オアシス路や南海路を通って流入してきたインド由来の大乗仏教が普及、これが隋唐の絢爛たる仏教文化を形成した。ギリシア・ローマ文明から西欧文明への世代交代期にも、民族移動による帝国の瓦解と新宗教（キリスト教）の普及による新文明の形成があった。この点では、ユーラシア大陸の西も東も南も共通している。しかし、中国文明とインド文明の場合には、ギリシア・ローマ文明と西欧文明とは違って、世代交代という形はとらずに、同一地域に同じような性格をもった文明が再生したのである。だから、これは、サイクル論で捉えた方がより適切であろう。いずれにしても、文明の世代交代やサイクル交代に、文明と文明を結ぶ横の関係が大きな働きをしていたことに、注目しておかねばならない。

今まで、われわれは、人類が長い歴史の中で営んできた多くの文明の中から、影響力の目立って大きかった大文明を取り上げ、それらを、それぞれ独立の主体として自律的に変動していくものと考え、これらを中心に考察してきた。メソポタミア文明、エジプト文明、ギリシア・ローマ文明、西欧文明、アラビア文明、インド文明、中国文明などは、その代表である。われわれは、これらの文明を独立した中心文明として捉え、その共通した変動パターンを比較考察してきたのである。

しかし、どのような文明も、他の文明との相互作用なくして、形成もされなければ、変動もしない。文明と文明は、相互に関係し合うことによって、絶えず流動変化していくものなのである。しかも、この場合、最初に一つの文明と他の文明が主体的に存在し、かくて後、相互に作用し合うと考えることはできない。事実は逆であって、相互に作用し合うからこそ、一つの文明も、他の文明も、互いに自己自身を形成し、変動していくのである。諸文明は、独立して発展するのではなく、相互に連関し合いながら、進展していくものである。文明は、出会いによって変動する。

文明は、他の文明の流入によって、新しい形成を行なう。この場合、他の文明の要素のみが流入してくる部分的伝播にしても、他の文明が全体となって押し寄せてくる全面的伝播にしても、他の文明の観念だけが流入してくる間接的伝播にしても、いずれにしても、新しい文明を受容した側は、新しい文明を独自の文脈の中で翻訳し、文化変容を行ないながら、受容していく。いかなる文明も、たとえそれが中心文明であっても、他の文明の流入や影響を免れない。だから、どの文明も雑種的であり、重層的である。実際、中国文明も、オアシス路や南海路を通して、インド文明やペルシア文明、ローマ文明やイスラム文

明と密接に連絡し、その大きな影響を受けて形成してきた。同じことは、インド文明やイスラム文明、西欧文明などにも言える。

諸文明を、それぞれ、独立の固定した実体と考えることはできない。文明は実体ではなく、過程であり、関係においてあるものである。トインビーは、『図説・歴史の研究』で、大文明あるいは中心文明を、独立文明（independent civilizations）と呼んでいるが、実際は、どの文明も、他の文明から独立してはない。⁹なるほど、トインビーも、文明の出会いを考えた。しかし、この文明の出会いを深く考えていくと、シュペングラーはもちろん、トインビーの変動論も崩れる可能性がある。

周辺文明論

人類が今まで生み出してきた諸文明のうち、主立ったものを取り上げ、それを中心文明または基本文明として、その独自の変動や出会いを考えただけでは、人類の文明史を広く覆ったことにはならない。中心文明のまわりに、その強い影響下のもとで育ちながら、それなりに独自の存在を主張している文明、つまり周辺文明がある。周辺文明は、おおむね、中心文明の影響のもと、中心文明から多くのものを借用しながら文明化を果たし、一つの文明として成立していると言える。

トインビーを批判して、周辺文明の設定の必要を提唱したのは、バグビーであった。トインビーは、二十一ないし二十三の文明をあげ、それらを同等のものとして、主にその変動パターンを研究した。しかし、バグビーは、『文化と歴史』の中で、それだけでは十分ではないとし、大文明（major civilization）と周辺文明（peripherical civilization）、または一次的文明（primary civilization）と二次的文明（secondary civilization）の区別をしなければならないことを提唱したのである。バグビーによれば、周辺文明は、大文明よりも寿命が短く、芸術様式、技術、基礎的な制度、価値、観念のいくつかを大文明から借用して、文明化を果たす。のために、周辺文明は、自律的発展がなく、大文明の動きに影響されて、常に他律的・外発的に動く。だから、周辺文明は、創造力に欠け、他の文明へそれほど多くの影響を与えることなく、大芸術様式とか大思想体系を生み出さない。とはいえ、それは、なお土着の観念、価値、制度を保持しているために、大文明とは別の文明として扱わねばならない。バグビーは、大文明に属するものとして、バビロニア、エジプト、古代ギリシア・ローマ、インド、中国、近東、西欧、中米、ペルーをあげ、それらの周辺文明として三十地域をあげている。その考えによれば、朝鮮や日本は、中国文明の周辺文明となり、東南アジアやセイロンやチベットなどは、インド文明の周辺文明だということになる。¹⁰

もっとも、このバグビーの考えにも、欠点がないわけではない。何より、大文明（中心文明）といつても、独立しているわけではなく、自律的に変動しているわけでもない。大文明も、常に他の文明の影響を受け、周辺文明同様、他律的に変動している面を見落としてはならない。また、インダス文明やシロ・フェニキア文明（シリア文明）、ロシア文明や日本文明などのように、周辺文明といつても、独創性の高い文明もある。さらに、チベット文明や東南アジア文明、朝鮮文明や日本文明、そして、ロシア文明などのように、寿命の長い周辺文明もある。さらに、また、シロ・フェニキア文明（シリア文明）、グレコ・パクトリア文明、トルコ・タタール文明、東南アジア文明、チベット文明のように、中心文明から受け取った文明要素を改良したり保存したりしながら、それを他の中心文明に受け渡し、中心文明の成立や変動に大きな影響を与えた周辺文明もある。つまり、周辺文明がしばしば媒体文明の役割を果たすことを考えなければ、文明の動態を十分把握することができないであろう。バグビーの周辺文明論では、まだ、文明のダイナミズムが十分捉えられていないと言わねばならない。

トインピーは、『再考察』で、バグビーの批判を受け入れ、大文明を独立文明、周辺文明を衛星文明（satellite civilizations）と言い換えて、旧来の文明表を整理し直した。その結果、日本、朝鮮、ロシア、イラン、ヒッタイトなどが、衛星文明に格下げされるとともに、東南アジアやチベットなど、いくつかの文明が衛星文明に格上げされ、合計十五の衛星文明が設定された。¹¹しかし、トインピーにおいては、独立文明と衛星文明の相互関係については、必ずしも十分な分析が加えられているとは言えない。

周辺文明の中心化と中心文明の周辺化

中心文明と周辺文明、あるいは、独立文明と衛星文明を区別し、それらが花芯と花びらのような関係にあるとみただけでは、文明史の動態を把握したことにはならない。文明の動態を把握するには、諸文明の交流や相互作用を通して、周辺文明が中心化したり、中心文明が周辺化したり、中心と周辺の逆転や交代が起きることを考え合わせねばならない。

中心文明あるいは基本文明を取り上げてみても、その多くは、もとは周辺文明から出発している。エーゲ文明やギリシア文明も、オリエントの諸文明（メソポタミア、エジプト、ペルシア）の周辺文明として出発している。西欧文明も、ローマ文明やシリア文明、ビザンツ文明やアラビア（アラブ・イスラム文明）文明の周辺文明として誕生し、成長してきた。十二世紀頃までは、西欧文明も、地中海の諸文明の周辺文明にすぎなかった。西欧文明は、これらの文明から、キリスト教、法制度、哲学や科学、文字などを受容し、それらを自己の

ものとしながら、成長発展し、十六世紀以後、周辺文明から中心文明へと飛躍していったのである。

ロシア文明も、ビザンツ文明の周辺文明として出発している。ロシア文明は、十世紀末から十一世紀にかけて、ビザンツ文明から、ギリシア正教、法制度、建築、美術などを受容して、文明化を果たした。ツアーリという皇帝の称号も、ビザンツ由来のものであった。ロシア文明が、周辺文明から中心文明へと自立していったのは、タタールの輜を脱した十五世紀半ばから十六世紀にかけてのことであったとみてよいであろう。

日本文明も、また、西欧文明やロシア文明と同じような歩みをしている。日本文明は、概して、中国文明の周辺文明として誕生したとみてよいであろう。日本文明は、主に中国文明から、仏教や儒教や道教、律令制、漢字などを受け入れることによって、文明化を果たした。それは、およそ六、七世紀頃と考えてよい。日本文明が、中国文明を消化しながら、次第に中国文明から自立し、中心文明への歩みを始めたのは、九世紀末以降である。そのメルクマールとしては、遣唐使の廃止、摂関政治の開始、仏教の土着化と新仏教の成立、仮名の発明、王朝文学の隆盛、寝殿造や大和絵の創案、書道や彫刻における和様の発達などがあげられる。¹²さらに、中世の封建制の成立や近世の世俗化の過程を通して、日本文明は、中国文明とは別の道を歩んだと言える。この点では、確かに、日本文明は、西欧文明と平行している。もちろん、日本文明は、自立以後も、貿易や交流などを通して、中国文明の影響を深く受けた。ただ、それは、周辺文明としてよりも、一個の中心文明としての主体的受容であったとみてよいであろう。

西欧文明やロシア文明や日本文明の成立と発展を一瞥するとき、その歩みには、共通した動きが見られる。どの文明も、周辺文明として、隣接の中心文明から、高度宗教、政治制度、法、思想、芸術、技術、文字などを借用し、文明化を果たし、それを自己自身の土壤で消化しながら発展させて、やがて、隣接の中心文明から自立し、みずからが一個の中心文明となっている。

文明の動態を把握するには、また、周辺文明の中心化ばかりでなく、逆の、中心文明の周辺化という現象もみなければならない。中心文明の周辺化とは、中心文明として成立した文明が、後続のより優勢化した文明の影響下に組み入れられ、周辺文明化することである。ここでは、あとから発達してきた強い文明が、その軍事力や経済力や文化力にものを言わせ、自己の領域外に拡大、他の文明の領域に浸透し、これを、逐次自己の文明の中に組み入れていくという現象が見られる。その文明の浸透力は強大であるから、まわりの文明は、たとえ、それがかつて中心文明として威容を誇っていた文明であろうとも、外来の優勢な文明に屈伏し、それを否応なしに受容せざるをえなくなる。その受容に

は、強制的受容と自発的受容、消極的受容と積極的受容の二種類があるが、いずれにしても、ここでは、旧来の中心文明が突如として周辺文明化されるという現象が見られる。

トインビーが、文明の出会い論、特に空間の次元における出会い論の中で考察した〈ギリシア化〉と〈西洋化〉という現象は、中心文明の周辺化の最も適切な事例である。実際、オリエントの諸文明の周辺文明として成立したギリシア文明は、ヘレニズムに至って強大化し、地中海の中心文明となるとともに、逆に、かつて中心文明であったオリエントの諸文明を逐次周辺文明化していく。また、同様に、地中海の諸文明の周辺文明として成立した西欧文明が、十六世紀以後、ルネサンスや科学革命や産業革命を通して強大化、みずから中心文明となるとともに、地球上を席捲、地球上のほとんどの文明を周辺文明化していく。この文明変動によって、かつて中心文明として威容を誇っていたアラビア文明も、インド文明も、中国文明も、そして、ロシア文明や日本文明も、例外なく、西欧文明の周辺文明と化したのである。この中心文明の周辺化には、植民地化という形での強制的な編入もあれば、逆の自発的編入もあったが、どの文明も、否応なしの同化の努力を余儀なくされたことは確かである。

トインビーの『歴史の研究』では、この西洋化の有様が、ギリシア化との平行関係から、詳細に考察されている。トインビーが、これらの文明の相互作用を、〈挑戦〉と〈応戦〉という概念で捉えたことは、よく知られている。トインビーは、強い文明が、圧倒的強さをもって他の文明領域に拡散し、否応なく流入してくるのに対して、受け入れ側の文明がどのように対応していくかを、つぶさに考察したのである。¹³

周辺文明の中心化にしても、中心文明の周辺化にしても、中心文明と周辺文明の逆転現象は、文明と文明の相互作用から起きている。文明と文明は、相互に作用し合うことによって、互いに絡み合い、相互進化（共進化）していくものなのである。文明は、決して、そこに静止して存在するものではなく、文明間相互作用によって、常に変動していくものである。文明と文明が不变の実体として存在し、かくて後、それらが互いに合うというのではなく、互いに合うことによって、文明は変動していくのである。文明は関係においてあるものであり、関係によって変化していく過程である。

周辺文明は、中心文明の周辺に誕生し、成長するものではあるが、しかし、だからといって完全に中心文明に従属するものではない。周辺文明は、中心文明の強い影響下にありながら、これを選択的に受容し、自己の土壤に合わせて変容し、創造的に借用しながら、独自の文明を築いていく。だから、周辺文明は、中心文明に還元することのできない独自性をもっている。

さらに、周辺文明は、必ずしも、一つの中心文明の影響のみを受けているだ

けではない。周辺文明は、多くの場合、複数の中心文明の周辺文明である。そのため、周辺文明は、しばしば、多くの文明を複合し、新しい創造的文明をつくりあげていくことがある。また、周辺文明は、二つ以上の中心文明の周辺文明であることが多いために、それは、複数の文明の媒介的な役割を果たす。むしろ、この媒介性をもった周辺文明が、複数の中心文明に新しい文明要素を手渡し、中心文明そのものを変えていく。とすれば、文明は、単に中心・周辺関係だけでは捉えることができないことになる。かくて、中心文明と周辺文明という概念とは別に、〈媒体文明〉という新しい概念を提出しなければならないことになる。

媒体文明という考え方

中心文明と周辺文明という概念を用意し、周辺文明の自立、周辺文明の中心化、中心文明の周辺化など、中心・周辺関係を見ただけでは、文明現象を十分捉えたことにはならない。周辺文明はまた媒体の役割を果たすのだから、〈媒体文明〉(medium civilization)という概念を周辺文明から独立させ、中心文明史観からも、周辺文明史観からも離脱し、文明のダイナミズムを把握しなければならない。今までの文明理論ではほとんどつかみきれていなかった遊牧文明、オアシス都市文明、港市文明、島嶼文明、半島文明などを把握し、文明理論の枢要な部分に仕立てるには、〈媒体文明〉という概念が必要である。

文明は相互作用から形成されるのだから、この相互作用を可能にする媒体文明の役割を評価し、相互作用中心の文明史観に転換しなければならない。文明と文明の相互交流を捉えるには、両者をつなぐメディアとしての文明がなければならないであろう。媒体文明は、その媒介作用によって、諸文明の形成と発展を可能にする。この場合、文明と文明が最初にあって、かくて後、両者を媒介する文明が形成されると考えるよりも、論理的には、むしろ、媒体文明が働いているからこそ、文明と文明が変動すると考えるべきであろう。結びつけるものが、結びつけられるものを、絶えず動かしているのである。間を結ぶものがなかったなら、結ばれる当のものも、活性化しないであろう。文明と文明は出合うことによって、成長し、発展する。その文明の出会いを取り持つのが、媒体文明なのである。

媒体文明は、また、〈中間子文明〉とも言い換えることができる。陽子と中性子を結びつけるものとして、中間子がなければならなかつたように、文明と文明を結びつける中間子文明がなければならない。しかも、中間子の交換によって、陽子と中性子の相互作用が可能になり、陽子も中性子も交代するのと同様、中間子文明を通して、種々の文物がやり取りされることによって、文明と文明は変動していく。

遊牧民や交易民、そして海洋民が、地域と地域の中間拠点につくりだす文明は、媒体文明の代表である。遊牧民や交易民、そして海洋民は、その移動性や商業性によって、文明間の仲介や伝達の役割を果たす。中央ユーラシアを駆け巡っていた遊牧民や、オアシス都市群を往来していた交易民、さらに、海を障害と考えずに自由に航海していた海洋民こそ、地球上の中心文明や周辺文明の変動を起こしていた仲介者であり、媒介者であった。彼らは、単に、中心文明や周辺文明を攪乱する辺境の民などではなかった。

媒体文明は、一般に、境界域に育つ文明である。文明と文明の間には、いずれにも属し、いずれにも属さない境界域がある。しかも、その境界域が、文明と文明を結び合わせている。そのような境界域という曖昧な空間こそ、異なった文明の接触や交流を可能にする場である。この場こそ、媒体文明の育つ場である。遊牧民や交易民や海洋民など、移動民は、このような境界域を縦横に越えて、諸文明の交流を可能にする。

媒体文明は、多くの文化の混在、または雑居を特徴としている。媒体文明が成長する境界域は、人、物、情報が目まぐるしく流入し流出する境域だから、そこでは、多くの文明要素が入り交じる。そこは、いわば文明の市場である。だが、このような文明の市場から、しばしば新しい文化が生み出される。多くの文明から流入してきた文明要素が、媒体文明という**舟塙**の中で融合し、アマルガムになる。そして、そこから創造的なものが醸成されてくる。さらに、それが、他の文明に移転されて、他の文明の形成に大きな役割を果たす。大乗仏教を生み出したクシャン文明、キリスト教を生み出したシリア文明などは、その代表である。媒体文明は、諸文明の出会いと融合、新文明の創出と移転という偉大な役割を果たす文明なのである。

陸の媒体文明

人類史上、特に、ユーラシアの文明史を長期にわたって左右していた媒体文明は、中央ユーラシアに活躍した遊牧民族がつくった文明であろう。中央ユーラシアの遊牧民は、一貫してユーラシアの文明変動に大きな役割を果たしていた。

それは、アーリア人の膨張と拡散に始まる。アーリア人の膨張と侵入は、地中海やオリエントやインドなどに、大きな文明変動をもたらした。アーリア人は、鉄器と戦車と馬を武器に、ユーラシアの各地に侵入、各地の文明を滅ぼすとともに、そこから、新しい文明を誕生させた。中央ユーラシアに登場したその後の遊牧民も、金属器製作技術や騎馬技術などを東西に伝え、東西の文明変動をもたらした。紀元前六世紀前後からユーラシアの西から東にかけて、ほぼ同時期に起きた人類史上の画期的な変革、つまり精神革命や大帝国の誕生も、

スキタイや匈奴など、騎馬遊牧民がもたらした騎馬技術と鉄精錬技術に負うところが大きい。そればかりでなく、騎馬遊牧民族は、古代の大帝国の滅亡にも、決定的な働きをした。紀元後三世紀から六世紀にかけて、ユーラシア大陸では、古代の大帝国が次々と滅亡しているが、これは、いずれも、騎馬遊牧民族の侵入が原因であった。これによって、古代の諸文明のほとんどが滅亡した。文明は単に自殺によってのみ滅ぶわけではなく、多くの場合、外からの侵入によって滅ぶのである。九世紀から十一世紀にかけての、中国文明、アラブ・イスラム文明、ビザンツ文明、西欧文明の変動も、中央ユーラシアを東西に移動した突厥やウイグルなど、トルコ系の騎馬遊牧民の侵入の影響が大きい。

十三世紀のモンゴル帝国の成立は、騎馬遊牧文明の完成期に当たる。騎馬遊牧民が形成した媒体文明は、逆に、この時期に、中心文明化したとみてよいであろう。モンゴルがつくりあげた文明を、單なる周辺文明とみることはできない。むしろ、逆に、モンゴルは、それまでのユーラシアの諸文明を、周辺文明化したとも言えるのだから、モンゴルがつくりあげた文明は、媒体文明を中心文明化したものとみた方が適切であろう。中心文明間を媒介するとともに、その動向を左右してきた媒体文明が、その発展の頂点で、逆に中心文明を席捲してしまった形態が、モンゴルの文明であった。実際、この時期、モンゴル帝国がつくったユーラシアの大循環路によって、ユーラシアに商業革命がもたらされた。日本や西欧の商業革命も、これに刺激されている。ユーラシアの東部も西部も、モンゴルを媒介として相互進化したのである。

アーリア、スキタイ、匈奴、ゲルマン、鮮卑、突厥、ウイグル、モンゴルなど、これらユーラシアの草原の道を疾駆した遊牧民の活躍は、三〇〇〇年あまりにわたってユーラシア史を左右してきた。それにもかかわらず、遊牧民の文明を文明として十分に扱っていないのは、中心・周辺関係だけで文明をみる偏見によるものであろう。ユーラシアの諸文明は、必ずしも自律的に変動してきたわけではなく、その発生、成長、衰退、解体、消滅、いずれにも外部からの刺激や衝撃があった。その外的要因として、遊牧民族の働きは無視することができない。ユーラシアの東や西や南で、旧文明を破壊し、新文明を創出していたのは、中央ユーラシアの騎馬遊牧民族だったのである。

なるほど、遊牧民は、单一の文化をもった单一民族ではなく、空間的にも、時間的にも、多様な文化をもった多様な民族である。しかも、彼らは、その故地では、偉大な構築物もほとんどつくらず、都市をもつのも、文字をもつのも遅かった。そのかぎりは、中心文明や周辺文明から見た文明の条件を満たしていない。しかし、だからといって、これを文明ではないと言ってしまうと、遊牧民が果たしていた世界史への大きな貢献を見落としてしまう。トインピーも、『歴史の研究』の中で、遊牧民の文明を〈発育停止文明〉とし、軽視している。¹⁴

だが、それは、中心文明史観の限界である。遊牧民の文明を、媒体文明として、その偉大な働きを評価し、位置づける必要がある。

遊牧民は、単に破壊的な仕事をしただけでなく、創造的な仕事もした。遊牧民は、侵入してきた先々で、土着の農耕都市文化を吸収し、自己の合理的な価値観や文化と融合させるとともに、他の文化とも総合し、そこから文明の新しい変革を起こしていった。文明を作り変えていくこの遊牧民の能力は、高く評価されねばならない。それは、人類の文明形成に大きな意味をもっていたのである。さらに、何よりも、東西文明の交流や移転に果たした遊牧民の役割が重視されねばならない。遊牧民は、その交易活動や民族移動によって、ユーラシアに登場した多くの文明を結びつけ、それらを変動させていく重要な役割を果たした。遊牧民が文明と文明の横の関係で発揮したすぐれた媒介能力は、無視することができない。

オアシス都市群のつくる文明も、媒体文明として、文明理論の中に位置づけねばならない。ユーラシア大陸を東西にまたぐオアシス都市文明は、ペルシア文明やヘレニズム文明やアラビア文明（アラブ・イスラム文明）の周辺文明、または、中国文明やインド文明の周辺文明とも理解することができる。しかし、それだけで済ませておくわけにもいかない。境界域に属する周辺地域は、單なる周辺ではなく、高度の媒介能力をもっているのだから、オアシス都市文明を媒体文明として位置づけねばならない。そうするなら、文明の新しい様相も見えてくるであろう。

オアシス都市文明は、交通の要衝に成長する文明であり、人、物、情報が盛んに行き交う文明の十字路に育つ文明である。それは、中継貿易を基盤にして成り立っているために、諸文明の接触と交流の場を提供し、文明の超伝導地帯を形成する。そこでは、盛んな商業活動とともに、各地から多くの文化が流入し、各種の宗教、言語、芸術、思想が混交する。オアシス都市文明は、他の媒体文明同様、文化の混在を特徴としている。しかし、この文化の混在から、新しい創造も生まれてくる。創造的な文化は、諸文明の出会いと融合から形成されるのである。

クシャン帝国が生み出した大乗仏教は、オアシス都市文明が創造した独創的文化の一つである。クシャン帝国は、インドから流入した仏教文化をギリシア・ローマ文化やペルシア文化と融合させて、その中から大乗仏教を創出した。これが、中央アジアや東トルキスタンを通って、中国、朝鮮、日本にまで受け渡され、中国文明、朝鮮文明、日本文明の宗教、学問、芸術、国家、社会生活まで、すべてに及ぶ文明の大変革をもたらした。クシャン帝国が生み出した大乗仏教は、單なる東西交渉史の枠だけでは捉えることのできない文明史上画期的な役割を果たした。それは、媒体文明としてのオアシス都市文明の大きな成果

であった。

大乗仏教の伝播にも見られるように、中国文明や朝鮮文明や日本文明など、東アジアの諸文明は、オアシス都市文明を媒介として、インド文明やペルシア文明、ビザンツ文明やローマ文明と深くつながり、その深い影響を受けた。逆に、ペルシア文明やアラビア文明、ローマ文明やビザンツ文明、そして西欧文明など、ユーラシアの西部の文明も、オアシス都市文明の媒介を経て、中国文明とつながり、その深い影響を受けた。

また、オアシス都市文明を一つのまとまった文明として見るなら、それが、オアシス路を通して、東の文明にも南の文明にも西の文明にも、楔のように深く食い込んでいることが分かる。中国華北の河西回廊、北西インド、イラン高原などは、オアシス都市文明と中国文明、インド文明、西アジアの諸文明が互いに領域を共有する境域である。ユーラシアの大文明は、そのような共通境域を新文明の流入口として、互いにつながり、互いの文化を受け取り、自らの文明形成に資していたのである。

オアシス都市文明は、文明交流圏の結節点に育つ文明であり、ユーラシアの諸文明を結び、それらに刺激を与える文明である。それは、ユーラシアの諸文明の架け橋となるとともに、それらを変動させていく大きな役割を果たしてきた。オアシス都市文明は、単なる辺境文明でも、周辺文明でもなく、諸文明の媒介の役割を果たす媒体文明なのである。

海の媒体文明

陸上のオアシス都市文明に当たる海上の媒体文明は、港市によってつくりだされる文明である。海上交易によって縦横に結ばれた港市には、オアシス都市同様、多種多様な人、物、情報が集まり、多くの文化が混在し、重層的な世界がつくられる。港市は、海上交通路の結節点であり、各地の情報が集まる情報センターであった。だから、それは、相互の海域間を連絡し、文明の伝播に貢献し、結果として、文明と文明をつなぐ働きをする。港市は、国際海上交易の拠点であったから、古来、港市を中心とした海洋商業国家、港市国家が発達した。そして、この港市国家によって、港市文明とでも呼ぶべきものが成立した。

人類の文明史上、最初に登場した海の媒体文明は、メソポタミア文明とインダス文明を結ぶ湾岸文明であった。ペルシア湾岸に成長した湾岸文明は、メソポタミア文明とインダス文明を中継貿易によって媒介する港市文明であった。東南アジア文明や南インド文明は、そのような港市文明の発達形態であった。

港市文明は、オアシス都市文明同様、単なる周辺文明ではなく、むしろ、中心文明や周辺文明に新しい文明要素をもたらす媒体文明であった。港市相互の結びつきによってつくられる海上ネットワークは、国境はもちろん、文明の境

界をも越えて、文明間相互作用の役割を担った。さらに、港市は、ユーラシアの東西に発達した中心文明や周辺文明の新文明流入口としても、大きな役割を果たした。

陸上のオアシス都市文明に当たる海上の文明として、港市文明とともに、島嶼によってつくりだされる文明も考えておくべきであろう。島に育つ文明は、大陸に育つ中心文明から見れば、辺境文明、あるいは、せいぜい周辺文明としか見られない。しかし、島は、決して辺境でもなければ、周辺でもない。島には、海上交易網の結節点として、港があり、常に新しい文化が流入していた。島は、自立性と独自性をもつが、決して閉ざされてはいない。それどころか、海上交通によって、他の世界と縦横に結びついていた。だから、島という小さな拠点には、外の大きな世界が集約されている。島は、港市同様、新文明の流入拠点であり、そこから、また、新文明が流出する拠点でもあった。島は、新しいものを受け入れ、新しいものを受け渡す文明の変電所だったのである。

エジプト文明をはじめ、オリエントに発達した古代文明をギリシア文明に伝えたエーゲ海域のクレタ島。アラビア文明を西欧に伝えたシチリア。東南アジアや南インドの文物をアラビアやエジプトに伝えたソコトラ島。インドの仏教文化の中継地点となったスリランカ。インド文明と中国文明の仲介を果たした東南アジア島嶼部。スペインの拠点となって、明清と西欧を結んだルソン島。オランダの拠点となって、東南アジア、中国、日本を結びつけた台湾。同じく、中国、日本、東南アジアを結び付けた琉球。朝鮮文明と日本文明を連絡した対馬。これら島嶼群が果たした文明の伝導の役割は、無視することができない。島嶼文明は、互いにネットワークを形成しながら、中心文明と中心文明、中心文明と周辺文明を結んだ媒体文明だったのである。

陸と海の中間域に属する半島に育つ文明も、文明の伝播と中継の役割を果たした。半島は、海からの新文明流入とそれの大陸への伝達、また、大陸からの新文明の流入とそれの他の大陸や島嶼への伝達など、文明の伝播に貢献した。アラビア文明を西欧文明に受け渡したイベリア半島やイタリア半島。中国やインドの文物をビザンツや西欧に伝えたアラビア半島。インド文明と中国文明の仲介をしたインドシナ半島。ユーラシア大陸の諸文明を日本に受け渡した朝鮮半島。これら半島に育った文明も、媒体文明の役割を果たしていたのである。

東南アジア文明は、港市、島嶼、半島すべてを含み、偉大な媒介機能を果たした海の媒体文明である。東南アジアの島嶼部や半島部には、紀元後、多くの港市が発達し、海上交通と中継貿易でにぎわい、多くの港市国家が林立した。その港市国家群によって担われた東南アジア文明は、南海路のネットワークの重要な結節点に成長した文明である。それは、東アジア海域とインド洋をつなぎ、東アジアと南アジア、そして西アジアとの橋渡しをした。そのため、東南

アジアには、ヒンドゥー教や仏教、イスラム教やキリスト教、儒教や道教など、あらゆる宗教が流入し、それとともに、多種多様な文物や民族が入り乱れて、重層的な融合文化が形成された。と同時に、東南アジアは、流入してきた種々の文明要素を、東アジアにも、南アジアにも、西アジアにも、そして西欧にも伝えた。

東南アジア文明は、今まで、インド文明や中国文明やイスラム文明の周辺文明として扱われてきた。しかし、東南アジア文明が、海のネットワークを通して、ユーラシアの諸文明の媒介をしてきた以上、これを、単なる周辺文明にのみとどめておくことはできない。東南アジア文明は、トインビーの言うように、文明の化石でもなければ、単なる衛星文明でもない。¹⁵ 東南アジア文明は、むしろ、ユーラシアの諸文明を媒介する海の媒体文明であった。東南アジア文明によって媒介された文明は、中国文明やインド文明やイスラム文明にとどまらず、日本文明や朝鮮文明や西欧文明も含まれる。実際、十五世紀以後の東南アジアには、琉球人や日本人や西欧人が進出し、東アジア海域とインド洋を連絡していた。日本文明と西欧文明も、東南アジア文明を通してつながっていた。それどころか、東南アジア文明は、インド文明と新大陸文明の媒体文明の役割さえ果たした。東南アジア文明は、オアシス都市文明同様、人類史にとって、極めて重要な働きをしてきたのである。

周辺文明の媒体化

今まで周辺文明として扱われてきた東南アジア文明が世界史上重要な媒体文明として解釈し直されるとすれば、これまで周辺文明として比較的副次的に捉えられていた文明の中に、媒体性の高い文明があることに気づく。

例えば、バグビーでも、トインビーでも、インド文明の周辺文明あるいは衛星文明とされていたチベット文明も、インドと中国、インドと遊牧との媒体文明の役割を果たしていた。インドから流入してきた密教がチベット密教となり、中国密教に影響を与えたし、また、モンゴル族や女真族が受け入れた仏教は、チベット仏教（ラマ教）であった。その点から言えば、朝鮮文明も、半島の特性を活かして、中国文明と日本文明の媒体文明の役割を果たしていたことになる。朝鮮は、中国由来の仏教や儒教、易、暦法、医学などを、陸路や海路を通して受容し、これをよく保存するとともに、日本に受け渡した。それは、アラビア文明を西欧文明に伝えたイベリア半島の果たした役割と共通する。

とすれば、諸文化の吹き溜まりといわれる日本文明でさえ、媒体文明の役割を果たしていたことが分かる。日本は、中国由来の扇や陶磁器を改良して西欧にもたらし、西欧のジャポニズムを起こしたし、近代になってからは、仏教東漸の波に乗って、禅仏教を欧米に伝えている。また、西欧近代文明をいち早く

受容して、中国に影響を与えたのも、日本である。日本は、西欧近代の諸学問の翻訳を明治以後盛んに行ない、その訳語を、日本への留学生などを通して、中国に伝達した。日本文明は、長きにわたって、インド文明や中国文明や西欧文明の遺産を溜め込んできたから、今日でも、日本文明は、欧米と非欧米の媒介の役割を果たしうる能力をもっている。

他方、バグビーが、バビロニア文明やエジプト文明の周辺文明としたシロ・フェニキア文明（シリア文明）も、極めて創造的な媒体文明であった。シリア文明は、シリア・パレスチナ地方に誕生した文明で、フェニキア人に始まり、ヘブライ人（ユダヤ人）に受け継がれたセム系の文明である。シリアの地は、陸海にわたる多くの交易路が交差する交通ネットワークの結節点に位置し、諸文明が出会った文明の十字路であった。特に、この地は、西南のエジプト文明と東南のメソポタミア文明の境界域に位置し、両文明の融合から新文明が生まれ出された。

フェニキア人が創造したアルファベットは、その一つで、これは、ギリシア・ローマ文明、西欧文明、ビザンツ文明、ロシア文明、アメリカ文明などに受け継がれていった。また、フェニキア人は、エジプト様式とアッカド様式を混合したフェニキア様式をつくり、それをギリシア文明に受け渡した。

シリアの地は、また、高度宗教の誕生地でもあった。この地は、強大な帝国の支配を何度も受け、その都度、外来文明の征服に遭遇した。これら諸文明の出会いと抗争の中から、高度宗教は生まれた。ユダヤ教そのものが、バビロニアの農耕都市文化とシリアの遊牧文化との出会いと抗争から生まれたものであった。さらに、このユダヤ教は、キリスト教とイスラム教を生み出し、人類史上に決定的な役割を果たした。ギリシア・ローマ文明とインド文明との出会いから、大乗仏教が生まれたのと同様、キリスト教も、ギリシア・ローマ文明とシリア文明の出会いと闘争から誕生した。ギリシア・ローマ文明に敗北したシリア文明の苦悩から、その文化闘争を越える次元で、この高度宗教は創造された。そして、それは、後期のローマ文明、ビザンツ文明、西欧文明に受け継がれていったのである。シリア文明は、キリスト教が誕生して後一〇〇年後には、ローマ文明に吸収され、消滅したが、シリア文明が生み出したキリスト教は、後期ローマ文明をはじめ、その後の諸文明を支配した。シリア文明は、偉大な媒体文明の役割を果たしたと言えよう。

中心文明の媒体化

メソポタミア文明の周辺文明として成長し、やがて中近東に君臨する中心文明となったペルシア文明も、また、その文明の性質上、媒体性の高い文明であった。アケメネス朝、パルティア、ササン朝と続くペルシア文明は、草原の道

やオアシス路やインド洋を地中海と結ぶ交通の要衝を占め、そこに、受容性の高い文明を築いた。ペルシア文明は、基層文化の遊牧文化の上に、オリエントの諸文明を総合、さらに、ヘレニズム、ローマ、ビザンツ、インドなどの諸文明を受容し、これらを混合して、すぐれた融合文明をつくりだした。そして、それを、東西の文明に受け渡したのである。宗教においても、ゾロアスター教を主軸としながら、ササン朝ペルシア期には、インドからは仏教が、ビザンツからはネストリウス派のキリスト教が流入、それらを融合してマニ教を創始し、東西に伝えた。ペルシア文明は、ギリシア・ローマ文明やインド文明や中国文明の交流の場を提供するとともに、それらの文明の橋渡しをし、文明移転に貢献、東西文明の媒体の役割を果たしたのである。

ビザンツ文明やペルシア文明の周辺文明から出発し、ユーラシア大陸の無視できない中心文明となったアラブ・イスラム文明（アラビア文明）も、同時に、巨大な媒体文明でもあった。アラブ・イスラム文明は、草原の道、オアシス路、インド洋、地中海を相互に結び、中国、インド、ヨーロッパ、アフリカをつなぐ結節点に成長した文明で、商業と都市のネットワークによって成り立っていた。この陸海に渡るネットワークを通して、中国から伝えられた製紙法、火薬、羅針盤、印刷術などは、西欧に伝えられ、西欧のルネサンスと大航海を可能にした。また、インド起源の数字や諸科学をアラビア数字やアラビア科学に作り直し、これを西欧に伝えたのも、アラブ・イスラムであった。さらに、ギリシアの哲学や科学を、ビザンツ経由で受け取り、これをアラビア独自の哲学や科学に仕立て、西欧に受け渡したのも、アラブ・イスラムであった。アラブ・イスラム文明は、空間的にも、時間的にも、媒体文明の役割を果たしていた。アラブ・イスラム文明は、中国文明やインド文明と、ビザンツ文明や西欧文明の媒体文明であることによって、その繁栄を保っていた。その後のトルコ・イスラムも含めて、イスラム文明は、諸文明を媒介する巨大な媒体文明として、数世紀にわたりユーラシアの文明史を支配したのである。

このように、中心文明が媒体文明の働きをすることに思い当たるなら、東アジアの中心文明である中国文明も、媒体文明の役割を果たしていたことに気づく。現に、国際性の豊かな唐時代の中国文明には、大乗仏教の伝播にも見られるように、陸路や海路を通して、インド、ペルシア、アラビア、ビザンツなどの諸文化が流入、中国文明は、それらを自己の土壤に融合しながら、朝鮮文明や日本文明に受け渡した。中国文明やアラビア文明は中心文明には違いないが、それ自身、諸文明の媒体の役割をも果たしうるのである。

〈中心文明〉〈周辺文明〉〈媒体文明〉という概念は、実体概念ではなく、機能概念と考えねばならない。実際、中心文明といつても、そこに実体として固定され、永遠に変わらない文明として存在するわけではない。中心文明も、多

の場合、初めは周辺文明から出発するし、また、突如として周辺化してしまうこともある。さらに、中心文明自身が、媒体文明の役割を果たすこともある。周辺文明も、同様に、しばしば成長して、中心文明になりうるし、媒体文明にもなりうる。媒体文明も、発展すれば、中心文明化して世界史を支配し、他を周辺化することができる。また、媒体文明は、その性質上、常に複数の中心文明の周辺文明という性格をもっている。中心、周辺、媒体が、それぞれ機能概念として、相互に転換しうるところに、文明の動態というものがある。

文明交流圏

文明は曼荼羅構造をしている。諸文明は相互に連関し、相互につながり、互いに映し合い、作用し合って、生成変化していく。人類の文明史では、時間的にも、空間的にも、絶対不動の中心点というものがあるわけではない。

文明の曼荼羅構造は、また、文明のネットワーク構造としても把握することができる。交通路や交易路を通して、陸にも海にも形成された文明のネットワークは、互いに連動しながら、文明と文明を結びつけ、諸文明の交流と伝播を促進し、文明の変動を可能にしてきた。文明のネットワークを通して、文明の諸要素が波のように伝播し、文明の接触と交錯を引き起し、文明の変動をもたらした。媒体文明は、この文明のネットワークの結節点に成長する文明である。媒体文明は、文明のネットワークをつくりだすとともに、そのネットワークそのものによっても形成される。媒体文明の変動はネットワークの変動であり、ネットワークの変動は媒体文明の変動である。この媒体文明とネットワークの変動が諸文明の変動をもたらす。

海や陸に張り巡らされた文明ネットワークの場は、また、文明交流圏と呼ぶことができる。伊東俊太郎は、基本文明（中心文明）と周辺文明という概念だけでは不十分と考え、文明交流圏という概念を提出した。基本文明と周辺文明という枠組みだけでは、まだ文明の捉え方が静的であり、諸文明の発展を、一層動的に相互連関的に捉えるためには、それを可能にする文明交流圏という動的枠組みが必要だと考える。文明交流圏とは、一定時代の一定地域における恒常的な歴史的交流の場である。そのような複数の文明が交流し合う文明交流圏としては、中央アジア文明交流圏、地中海文明交流圏、サハラ文明交流圏、インド洋文明交流圏、東南アジア文明交流圏、東アジア海文明交流圏、太平洋文明交流圏、大西洋文明交流圏、核アメリカ文明交流圏などが考えられている。¹⁶

海にしても、陸にても、文明交流圏は、諸文明の仲立ちをして、諸文明を発展させる役割を果たす。ただこの場合、文明と文明があって、かくて後、文明交流圏が成立すると考えるより、論理的には、逆に、文明交流圏があって、はじめて、諸文明の形成が可能になると考えるべきであろう。交流なくして文

明はない。文明交流は、文明の本質であり、文明の命なのである。

文明交流圏は、諸文明の絶え間ない出会いと衝突、接触と融合の場であり、交流と結合の場である。この文明交流の場は、諸文明の相互関係を可能にする場である。と同時に、それは、諸文明の相互関係そのものによって形成される場でもある。文明は、それを可能にする場から切り離すことができない。文明は、文明交流の場から独立して存在することはできない。文明の中に場が働き出、場の中に文明が働き出、かくて、文明と場の相互作用の中で、文明も場も変化していく。媒体文明は、この交流の場を仲立ちする文明であり、いわば文明交流圏という場の量子である。川の流れの中の渦のように、媒体文明は、交流の場にできる渦である。

文明と文明の間を考えなければならない。文明は、実体ではなく、間ににおいてあるものである。文明と文明は、相互に連関し合いながら、密接な関係をもって生起している。その関係を、間に立って仲立ちするものが、媒体文明である。しかも、この結びつけるものが、結びつけられるものを変えていく。あらゆる文明は媒介されており、どの文明も媒介性をもつ。すべての文明はすべての文明の媒体なのである。

註

- 1 O.Spengler, *Der Untergang des Abendlandes*, I Bd., Einleitung, Beck'sche Verlag., 1923,
- 2 A.Toynebee, *A Study of History*, I IX X, Oxford U.P., 1979,
- 3 ibid., I, pp.84-92,
- ibid., XIII, pp.546-547,
- 4 ibid., XIII, pp.170-197,
- 5 A.Toynebee, *A Study of History* (new edition) , I 7・8, Oxford U. P., 1972,
- 6 A.Toynebee, *A Study of History*, XIII, pp.170-197,
- 7 A.Toynebee, *A Study of History* (new edition) , I 7, Oxford U.P., 1972,
- 8 R.Coulborn, *Fact and Fiction in Toynebee's "A Study of History"* Ethics, LXVI, 1956,
- 9 A.Toynebee, op.cit., p.72,
- 10 P.Bagby, *Culture and History*, Greenwood Press, 1963,
- 11 A.Toynebee, *A Study of History*, XIII, pp.558-561,

- 12 山本新『周辺文明論』 刀水書房 一九八六年 第二章 4
- 13 Toynbee, op.cit., IX,
- 14 ibid., III, pp.7-22,
- 15 ibid., XII, p.298,
ibid., XII, p.560,
- 16 伊東俊太郎「比較文明の枠組」『比較文明と日本』(中公叢書) 中央公論
社 一九九〇年 二五七～二五八頁

(出典 『小林道憲〈生命の哲学〉コレクション』 8 ミネルヴァ書房 2017 京
都 所収『文明の交流史観』 第八章 3)